

### 1. 部員2人からのスタート

その年(2003年)は新入部員が入らず、2年生2人だけでスタートしました。夏休み前から2人で上演できる脚本を探し回りましたが、なかなかいいものが見つからず、たまたま見せてもらった「演劇と教育」に「スワローズは夜空に舞って」が載っていて、これだと思い、部員と相談して上演することになりました。スワローズは3人登場するので、以前から音響を手伝っていた生徒を「セリフも少ないし、たいした役じゃないから。」とだまして(笑)、出演させました。

### 2. テキストレジ

中学生向けに書かれたものですが、読みあわせをするとゆうに1時間を越してしまい、東京都の基準(45分以内)に合わないので、カットする必要が出てきました。

私のテキストレジのやり方は、まず、全体をプロットに分けて見ます。スワローズは、20ちょっとに分けました。その上で、ストーリーの展開上重要なプロットと余りそうでもないものを考え、重要でないものは、思い切って全部切ることもあります。

スワローズの場合は、丸ごと切った上で、どうしても必要なセリフだけ、他のプロットにさりげなく混ぜたり、辻褄が合うように、プロットの順番を変えたりしています。かなり変更したので、作者の志野英乃さんから、「私も、他人の作品を原形をとどめないほど書き換えたことがあるのですが・・・」と遠慮がちな苦言を頂きました。

都大会発表時もスワローズが晩成の脚本大賞をとったときの審査員である辰嶋先生がいらっしゃるので、かなり怒られることを覚悟していました。しかし、「ただ切るのではなく、話がスムーズに展開するように、よく配慮してテキストレジしている。」と褒めて頂いた(と素直に思うことにしています)のでホッとしました。

### 3. 道具の準備

とにかく、マンパワーが足りないので、必要最小限の装置にしたいと思い、ベンチと物干しと観葉植物だけにしました。ちょっと、屋上というよりロビーっぽくなってしまいましたが、目をつぶりました。

設定が昭和40年代なので、リボンシトロンのピンや象が踏んでも壊れない筆箱、マジソンスクウェアバッグ等、今は店頭にはないものがたくさんあり、ネットで検索したり、あちこち電話をかけたりして揃えました。マジソンスクウェアバッグだけは余り重要でないと考え、脚本から削りました。また、ラストの実況中継は、ヤクルトのご好意で実際のものを入手することができました。もとの脚本ではラストで優勝シーンのスライドを使っていますが、演出上カットしました。

### 4. 練習の様子

事実上、スタートが9月に入ってからだった(前年の夏扶養は8月上旬から)ので、練習時間の確保の為、休日も練習をしましたが、土日両方はやらないようにしました。疲労の蓄積への配慮もありますが、私は演劇の練習は、集まって稽古をする以外の時間も大切なように感じています。

また、手伝いの看護婦役は、週に1回来るかどうかなので、ほとんどが二人での単調な練習になってしまいがちで、この部分は本当に部員が高いモチベーションでがんばり続けてくれました。また、時々役を交代したり、自分たちの練習の様子をビデオにとって見たりもしました。

練習日程としては、今までは、8月後半練習スタート、10月文化祭、11月地区大会という流れだったのですが、その年は文化祭がなくなっていたので、吹奏楽部や日本文化部(太鼓や踊り)、合唱部に声をかけ、近くの公民館で「文化部合同発表会」を企画しました。この公民館で、照明装置や音響設備に触れているので、地区大会も自分たちで操作する形式でしたが、非常に楽でした。

脚本が、もともとドラマチックな展開もなく動きも少ないので、練習は、ひたすら心理描写を徹底することに集中しました。微妙なセリフのニュアンスや「間」、何気ない視線や表情等をサブテキストを考えながら「追求」しました。

また、幸い学校の周りにはまだ自然が残っているので、イメージとマイム(舞台前方に手すりがある設定で演じるので)の動きをつかむ為に、校舎の4階のベランダで、脚本内に登場する「学校」「自分たちの家」などの位置を決め、30分ほど練習し、部室に戻ってきて、そのイメージで視線や動作がリアルになるようにする練習を毎回繰り返しました。

一番苦労したのは、浩二役の野球の動作でした。キャストが女の子で、運動が余り得意ではないので、バットを振ったり、ボールを投げたりする動作がまったく野球好きの少年に見えません。一緒にキャッチボールをしたり、野球部からバットを借りて素振りさせたりしましたが、これは最後まで課題として残りました。

地区大会直前は、45分に治める為に、時間を計りながら通し稽古をしました。プロットごとに測っていましたが、出来の良さはテンポとなって、はっきり数字に表れるので、質の向上にも役立ちました。

この代は、上級生が多彩で多才だったので、一年生のときにほとんど舞台経験がありませんでした。(その前の代は1年から主役で地区大会や都大会に出場していた。)

だから、この年はまずじっくり力をつけ、来年はぜひ都大会に出たいと話合っていました。幸い地区大会で最優秀賞をいただき(実はここにもドラマがあったのですが)、都大会に出られることになったので、12月は場面設定をして、るみと浩二で自由に演じることもやってみました。しかし、やはりこういう手法は継続的に行わないと効果が少ないと感じました。